

大友時代の府内病院（講演）

荒 卷 逸 夫

今からおよそ四〇〇年の昔に、約三十年くらいの期間に亘つて、この大分市に大きな病院が設立、開院されておりまして、當時としては非常に大きな病院であつたので、あちこちから患者がこの病院に集まつてきました。記録によりますと、相当遠方——大分附近だけじゃありません——九州一円から、さらにまた中国近畿地方から、更はずつと東京あたりまで知られて患者が来たということがいわれております。この病院の医師の中にルイス・ド・アルメイダというポルトガル人がいたのでありますが、この人の業績を私調べておりますうちに府内病院の全貌というものを調べる必要になつて、色々あれこれ文献をあさつてみました。そして大ざつばでございますが、およそ府内病院のありさまがわかつてきたように思いますので、ここに発表させて頂くわけでございます。

まず西暦一五五七年の一月に、病院を建てようという話がおこり、翌月の二月——一五五七年の二月に病院は設立されております。

それで、大体その当時の医学というものは非常に幼稚でございますして、ほとんど加持、祈禱、そういつたことで、今で申しますと、精神療法だつたんでございますが、この病院でもまた明らかに精神療法をやりました。

しかし、同時にすでに手術とか、あるいはまた薬でもつて治療するという新しい療法をやつております。それで、多い場合には外来患者が相当ございまして、それから入院患者は多いときには百名近くも収容しております。入院患者百名と申しますと、当時としては非常に大きな病院でございます。それからまた、出張診察といひますか院外に出かけて行つて治療を行うことによつて、——たとえば、これが大分の地図でございますが、（地図を指す）あつちこつちに二里、三里というところに、

看護夫——男の看護夫でございますが、そこらへ行つて患者をみる。今で申しますと、移動診療班というようなこともやつております。

それからもう一つは、看護夫、これは男でございますけれども、看護夫がある年には十二名程おりました。これが看護業務と、それから事務とを一緒に受け持つてやる、こういうこともやつております。

先ほど申しました入院患者の百人という数がどうして大きいかと申しますと、当時のこの大分府内の人口がどのくらいあつたかわかりませんが、これが三千人あるいは五千人、まあざーつと三千人と見ましてもその三千人の府内で百の病床をもつというとは非常に大きな病院であるということになります。

現在、大分市の人口は十三万人で大分市内にある病院の数はおそらく何百ありましようか、それらの全病院を合計したベツトの数というのが二千二百余あるのであります。つまり人口五五に對しベツトは一束ということになります。これを府内病院時代にはどういふ關係にあつたかといふことをみますと当時の人口を三千と仮りに見た場合に、府内病院のベツトは百床でありましたので一束あたり三〇人の人口となり、ほど現在の大分市の二倍の割の病床があつたということになります。これは非常に大きいことであります。推定では現在の大分に県立病院くらいの大きな病院が今よりも更に五つくらい建つたときと同じような勘定になります。これをそつくりそのままではめて行くことはどうかと思いますが、まあ当時としては非常に大きな病院だつたと思うんです。そういうわけでありまして、その頃の未開の時代によくもこのような施設が出来たものだと思うわけがあります。

次に病院の所在地はどこであつたかといふことでございます。ここにお見せしますのは立川先生秘蔵の昔の大分の地図でございますが、ここ（地図によつて示す）にデウス堂というのが書いてございます。いろいろ研究されている方のお話では、病院の所在地はこのデウス堂と書いてあるところではなからうかといふことでございます。この地図を説明申し上げますと、ここに万寿寺がございます。それから、ここに稲荷神社がございます。それから、これが大智寺、これが来迎寺。また東の方

に川がこういうふうに流れていました、この川ともう一つの川、すなわち本川である大分川の二つが東の方に並んで流れていました。

この小さい川というのは、現在はなくなつてしまひ、跡形がちよつとあるようです。私は、先般来この小さい川跡を探しておりますが、大分川のこちらがわにちよつと畑にへこみがずつと帯状に入つておりまして、そこが昔の小さい川あとでありまして、そうしてその上流は広瀬橋の所で本川に合流しております。四百年前に二つ川があつたんだという記録としては雪舟が大分に来遊したときにですね、雪舟の書いた「天開園画楼記」という本の中に府内の横に二つ川があるという記録が載ておるそうでございます。それで、この地図には川が二つ載つておりますのでおそろくずつと以前の地図、少くとも大体四百年前の地図じやなからうかと言つてあります。それから、デウス堂の位置でございますが、一体このデウス堂というのは今ならばどこにあたるのかということになるわけでございます。

昔の万寿寺がここにありません。今この場所には御存知かと思ひますがまだ塚が残つております。その塚は、現在そこへ行つてみますと、このくらいの高さに盛土してありまして、私の想像でございますが、あれがこらじやなからうかと考えております。

先般、私あそこの川の跡を通つてみまして、そこで働いておりました人に聞きましたところが、あの塚はこの万寿寺旧跡の東南隅に相当する場所にあるのだというふうなことを言つておりました。

そうしますと、この塚とそれから稲荷様が、これははじめから移動してないんだそうです。あとの建物はみんなそれ以後になつて新しい町として北の方のこつちへ移つて来たんです。稲荷様がここにあつて、万寿寺の塚と稲荷様とを結ぶ線と、もう一つ塚とデウス堂との間を結ぶ線とのなす角度から、デウス堂の位置を大体推定できるのではないかと思ひます。そうしますと今の日豊本線の鉄道線路のこちらへ来てゐるのではなからうかというふうに考えられるわけですね。ある人の説によりまして現在デウス堂址と書いてございます大きな標柱がたつていますが、あそこらあたりぢやなからうか、と。また、ある人の説で

は日豊線と前の大湯線と高商道路の三つの線によつてなる三角形の中央あたりにあつたのではないかという説と。また、この上田市長さんのお考えは、もう少しこつち南の方、つまり今の若宮神社でございますが、あそこあたりではなかつたらうかといつております。

しかし、どうもハッキリどの辺だということは決定できません。いずれにしろ、大体あの標柱の附近という大ざつばなこと以外には決定的な場所の指定は出来ないうであります。

一寸話が横道にそれますが、私は東新町の北の生れでございまして、子供のときに、東新町のこころあたり(南)を指しましてカサ、カサといつておつたのを覚えています。東新町南組のはしをカサと言つていたわけなんです。で、かさというのは笠で、頭の上の方にあるんで、かみの方という意味もあるわけでございしますが、カサというのは、ポルトガル語で、こういう人の「住院」というのをカサというんだそうです。カサということからここにそういうものがあつたんだろうと推察されるわけです。いずれにしてもこころあたりの所に病院があつたと想像されます。

それから、この病院の建物はどういう状況だったかと申しますと、大体二個所に分れて立つておりました。これも色々の文献から私の想像を申しますと建物は二つございまして一つは高い所に、もう一つは低い所に立つていたと、そういうふうに文献に書かれています。

まづ高い所には教会がございました。教会のほかには、南蛮人の住院がございました。そうして、低い所には最初に病院ができております。一五五七年の二月にできた病院がここにございました。この病院は二つに区分されておりました、こういうふうに真ん中が仕切られておりました、一方の側にはらい病患者を容れております。このらい病患者は非常に多かつたようですが、一方の側には内科の軽症患者と外科の患者を入れております。これが一五五七年でございまして、すなはち科としましては外科と内科、それからもう一つ皮膚科が出来ていたのでございます。こういうことをやつておつたんでございますが、患者がどんどん増えてくるのでこれでは到底収容しきれないということで、増築をやりまして大きな病棟を廻て増しまして一九五

七年の七月二日にこの増築は落成いたしました。これは「前の病棟に相面して」というふうに文献には、書いてございますので、私の想像でございませうけど、旧病棟にすぐくつつけて病棟を建てたんじゃないかと思われるのでございます。そしてその病棟の真ん中に、とにかく「真ん中」と書いてございますから、おそらくここだろうと思うんですが、真ん中に礼拝堂をこさえて、その礼拝堂の両側に部屋を八つずつ取つたわけです。小さい部屋をハーマニカ式に八つずつですから、両方で計十六になるわけですね。これは十六の部屋を持つたところの内科病棟があらたに作られたので、こゝに内科の患者を全部容れ、これまでの内外科病棟は外科だけの病棟になったのです。

それから、この内科病棟のここへヴェランダをこさえて、そこで手術をやっています。ですから手術室というのは特別にこさえておりません。屋外で手術をやりました。なぜか。それは、当時は部屋の中が暗いせいもございましたよ、もう一つは、耶蘇会の伴天連達は人間の肉を喰うのだということがもっぱら言われて非常に困つたことがあります。南蛮人は人の肉を喰うという評判がたつて、その悪い評判を打消すために手術はだれもがよく見える所でやろうということで、そとのヴェランダを利用してそこで手術をやっております。そしてこのヴェランダに接して先生方、医師の住まう家をこさえております。そしてこの辺に大きなクルスを立てまして、このすぐ横に今度は看護夫の住む所——慈善院と言っておりますが、看護夫の住む所を作っております。

なお、そのほかにこれを取り巻くように五つほどの、クリスチャンが住む所ですが、住居を建てております。

以上が建物の大要ですが、これらが実際にどういうふうになつておつたのか、文献には方向が全然書いてございませんので、つきり判らないのであります。どつちが左やら東やら、家がどういふ向きになつておつたのか全然書いてございません。結局まあ想像による以外に当時の状況をくわしく述べることは困難のようです。

高い地所といいますが、これが高い所なら家はこつちに向いていたんじゃないやなからうかと考えられます。それからこつちが若宮八幡でございませうが、この方が高ければ家はこつちに向いておつたんじゃないやなからうかと思ひます。これはどうもわかりま

せん。高い所がどつちにあつたか、どうもわかりません。

それからこの家（会堂を指す）の配置でございしますが、これは大体わかつております。これは大友宗麟が一五五六年に全部杉材をもつて、当時の金で三千クルサドという非常に高い費用をかけて作り、これを耶蘇会に寄贈したものでございます。

もう一つ。この高い地所は一体どくらの大きさかということになると、これまた全くわかつておりません。ただ朝になると、この会堂で礼拝をいたしますが、その礼拝が済みましてから、四百人が三列に並びまして、庭を行進をしたと書いてあります。三回行進をしたといいますが、おそらく行進をするのでしたら相当大きい広さではなかつたらうかと思ひます。この地図のデウス堂は稲荷様とほぼ必敵する大きさにあらわされてはおりますが、とてもこんな小さいものじやなかつたのではないかと考えるんですが、これもまた想像です。

それから、この高い地所の回りに竹や樹木がずつと植え込まれておりました。尚、病院の前には柵で囲いがしてあつたといふことは、時々大友方の内訌によつて争いがおこると、危険をさけるためすぐに病院前の門を閉じたということが書いてあります。こういうわけでございまして、病院の建物の状況については、私の調べました範圍ではこの程度のことしかわかつておりません。

次は治療の状況でございします。どういふような治療をしたかということになるんですが、先ほど申しましたように内科、外科、それにいふならば皮膚科があつたようです。ここへらい病患者を入れたんです。当時の日本国内の大きい都市では、もう既に内科医、外科医という区分は、あることはありましたが、一般には全科というよりも何でも屋であつたわけです。日本の東京とか大阪とか一部のところの状況は以上のようにありましたが、そのころの日本のその他の多くの所には医者と名のつく者はほとんどなく、もつぱら疾病は山伏や修験者といつたような人が、加持祈禱でもつてなおしておつたような状況で、今の精神療法の元祖のようなやり方でございました。そのような医療の暗黒時代において、既にこの府内病院には内科、外科というのがちゃんと今の様式で採用されておつたということは、これまた非常に大きな出来事でございます。総合

病院の形を一応整えようとした一つの病院であつたということで、これは全く画期的なことでございました。

外科の主任は先ほど申しましたルイス・ド・アルメイダという若いポルトガル人でございます。彼はポルトガルで医者免許を取りまして、そしてすぐインドに来て、インドからすぐにこちらに渡つて来ております。ここへ来たときには三十才の非常に若い元氣一ぱいの頃でありまして、このアルメイダという医師が育児院をこさえ、そのあとの病院の設計、増築を一人でやつたのでございます。云わば病院の生みの親、育ての親であつたのです。このアルメイダという人が非常におもしろいので色々調べてみたわけでありまして。

それから内科の方は、これは日本人でクリスチャンであつたキヨウゼンというお坊さんが主任となつてやつておりました。ですから、病院は内科と外科の二本立てでやつておつたわけですが、それ以外に、やはり日本人でパウロという若い先生が代診みたいなきことをやつておりました。アルメイダの診察は日に二回、——朝やつて晩やるんじゃないかと思ひますが、時間をきめて患者を診ております。で、外来の方では必要な薬を書いて出すし、外科では必要な入院させて手術をする。この手術は一日五、六回やつたということでございますので、相当な数の手術をやつていふと思ふんです。そうして、先ほども申しましたような場所（ヴェランダ）でやつております。人の見える所でやつたわけでございます。一体どういふ手術をやつたんだらうかということが私も非常に知りたいところでございますが、これがわかりません。一体その頃この府内病院でどういふ手術をしたらうかというわけです。当時は腫れますと、切る、ほとんどそれだけです。それから、たとえば、戦争でパツと切られた疵というのは、これを縫う。針と糸で縫うわけですね。つまり切開と縫合の二つくらいしかやつておりません。それがまあ當時のできる方の医者のすることがそれくらいです。腫れてくればちよつと膿を出すだけで、あとでその上をヤシ油か何かを塗つておつたようです。それから生傷ならば糸で縫う、これはもうやつておつたようです。ところで外国では、一五三六年ですが、そのころに初めて四肢を切り落す手術をやつております。これはフランスでございまして、一五三六年にアンブローズ・パレという有名な外科医が切り落す手術をやつております。アルメイダが府内に来ましたのが一五五五年でこ

ございまして、この人が学校を卒業したのが四六年となつております。アルメイダが故国のポルトガルで医師の免状を取つたのが一五四六年でございまして、府内へ来たのが一五五五年。そうすると、一五三六年には向うのヨーロッパでは既に切斷手術をやつております。アルメイダの就学中にその手術が行われてゐるわけでありますから、府内でもおそらくそういう手術をやつたのではないかと想像するわけです。というのは、患者はずいぶん遠方から、京都からも比叡山からも来ています。關東地方からも患者が来たというんですから、よほどのことをこの府内病院でやつていたんではなからうか、ということが想像されるんですね。つまり、アルメイダの医学には既にパレーの影響が十分現われているのではないかと、私は考えるのであります。しかし、阿知波五郎先生のお説によりますと、この当時の世界は、まだまだブルンシュウイク（ドイツ）の外科の時代であつたようで、アルメイダのなかには、まだパレーの外科は現われていない、とも言われています。結局のところそれ以上の詳しいことはわかつておりません。

それから、診療方法はたゞいま申しましたように、一般の患者は診て治療をするわけです。がもう一つはらい病、このらい病に対しては特殊な治療をやるというふうなことはもちろん書いてございせん。ただこの病院に入りますと食事はもちろん食べさせるんですが、肉あたりも食べさせたという記載が残つております。そのころは野鳥やにわとりとかいうような鳥類あたりは喰べておりましたけれども、野獸を除く四つ足のものは全然食べていません。

しかしこの病院では既にめ牛を殺して肉めしにして食べさせたということが記録にありますので、相当栄養のあるものを食べてたようでございませう。それで、当時のらい病というのが果して今のらい病かどうか、これもいろいろ研究の余地はあると思います。当時では、ちよつと栄養失調になつて手がはれて来てぶよぶよになれば、それをすべてらい病というふうにごつたこともあろうかと思われませう。それが非常に多い。

それから、梅毒が日本に入つて来ましたのが一五二二年です。一五二二年にはもう梅毒がここへ入つて来ております。そうしますと、病院が出来たのが一五五七年ですから、住民の間にはもう相当梅毒もあつたらうと思ひます。がこの梅毒あたりも一

緒にしてらい病というふうに取り扱つておつた傾向もあつたろうと思ひます。そのほかに結核もあつたろうと思ひますが、そういつたものがらい病という風に取り扱われますという、これはなおるわけでございますね。そこで面白い話があるというのは、このアルメイダが博多へ行きまして患者を診て治療し、キレイに治したことが書いてございます。患者の一人は、非常に頭の痛い、その頭痛のために自殺を何回か企てたといつたような人がですね、この人をアルメイダが診察治療しましたところが十三日ほどでその頭痛がなおつております。それからもう一つは男の人ですけれども、全身らい病であつたと書いてございます。この全身らい病の患者を一つみてくれというたので、そのアルメイダがみたわけです。そこで、自分はい病の薬は生憎持つていないけれども、ほかに持ち合せの薬があるからと言つてそれを病人にやつたところが、その全身らい病が三日でもつて全くなおつた^はとは書いてございせんが、全く健康な人のような顔になつたと書いてございます。つまり全身らい病が僅か三日の治療でよくなつたというわけです。こういつたものを一体どういふふうに医学的に解釈したらいいのか、らい病であればそう簡単になおるもんじやございません。しかし、らい病というのはですね、昔の日本の本を見ますという、大宝令という奈良朝時代の文献に実に詳しいらい病に関する記載が既にあります。鼻が落ち指が落ちまゆ毛が落ちるといふことまで書いてございますし、伝染するからかういふ人と一緒に寝てはいかぬといふふうな注意までがこの奈良朝時代の大宝令の中に詳しく書かれています。

そうなれば既に大友時代ではらい病に対して相当詳しく診断がつくだろうと考えられるわけですね。まああれやこれや考えてみまして、ある場合はなおらぬこともあるだろうし、ある場合は食餌療法でなおつたのもあつたんじゃないかと思ひます。いずれにしても六十名の相当重症な患者がなおつて退院したといふことを書いてございます。

それから看護の状況でございますが、この看護婦は男の看護夫が看護をやつています。これはクリスチャンでありまして、十二人おりましたが、それが二人で一年交替で当番といふのを受持つてやつております。責任者が二人おりまして、十二人が一組になりまして、それが看護や事務のことをやります。もちろんこれは全部無料で奉仕の下に行なわれたわけでした。従つ

て、金のやりくり、どうして病院を維持していくかということから、そういつた看護のことも、看護夫兼用の人がいろいろと工夫心配するわけでございます。

なお、先ほど申しましたように、移動治療班と申しまして、院外に出かけて行つて病人の治療をしながらいろいろ見舞品をあげる。そういつたこともこの看護夫の人々がやつておつたようです。

これらの看護夫は、先ほど申しましたように、院内に慈善院というのがございまして、そこに役とまりをしておりまして。以上病院のことをあれこれ申し上げました。

最後に、歴史上から見た病院の意義について一寸お話ししたいと思います。総括しまして、こういった大きな社会的な、文化的な施設というものが日本に初めてできたということが第一の意義ではないかと思ひます。

先ほど申述べました育兒院が一五五五年に設立されたのですが、その後二年にして病院が建てられました。この育兒院や病院が日本における耶蘇会の最初の社会的な、文化的な施設であつたということ、それが歴史的意義の第一でございまして。

それから第二の点は、この府内病院は外国人によつて日本に初めて医学的な施設が作られた、いうならば日本に最初の西洋医学が伝来したということでありまして、これは非常に大きな意義を持つものでございます。しかし、この病院の前に外国の医者が来ていなかつたかということになると、記録では既にその前に来ていたことにはなつております。一五四〇年にすでにここに一人のポルトガル人が来ていて、宗麟の弟の大内義長という山口の大名が手に傷を負いましたときに、その人が縫つたという記録がございます。これが医者だつたらうと思ふんですが、そうしますというと、ほんとうの外人による医療というのはこの病院開設の前にあつたわけでございます。

しかしながら、一つのまとまつた施設として、外国の医学が日本で初めて花開いたのは、やはり府内病院であると私共は認めるべきでありまして、これは医学史上特筆大書されるところのものでございます。

第三は、医学的に申しまして、この病院は日本における総合病院のはしり、つまり総合病院としての嚆矢であつたことであ

ります。それまでは、医者と名のつく者は、京都とか、大阪とか、日本の中央で一人か、二人か、三人か、四人くらいの極く少数だったろうと思います。その他の医療を行なうものとしては、みんな山伏や修験者などの加持祈禱や呪文による治療でございませぬ。きつねがついた、何がついた、あるいは怨霊のしわざだとかいったようなことで、これを祈りあげるとかそういったようなことで、精神療法一点張りでおつた時代に、既に府内病院においていわゆる科学的な治療をやつていたということは、これまた非常に画期的なものであつたろうと、かように思う次第であります。

時間になりましたが、文献考証が行き届いておりませんので、大半が私の主観をまじえました想像というよりも、夢想図のようなことを申上げてお耳を汚しましたが、こういうところで失礼をさせていただきます。

(この小文は昭和三十六年十一月二十七日、大分市上野田寿寺における大友祭の席上講演したものに若干追加したものである。)

(日赤大分病院長)

今年は例年になく寒冷異変であつたが宇佐郡「光勝寺」の記録に

よると、いろいろ異変のことが記されている。

文安元年 (1444) 豆小豆フル

文明十年 (1478) 六月十四日大雪フル

寛永四年 (1627) 六月十四日ノ内ニ

三奴ノアラレフル

延宝元年 (1703) 六月廿二日アラレフル

このほか日干、風雨、大水、作物のことなども記されている。

ことに特筆すべきものとして次のような記事もある。

寛保二年 (1742) 中津ノ魚町ニ、女八アシノ子ヲウムナリ、

当村ヘマイリ候

(富米記)